

インドネシアで 東都準硬式 広げた野球の輪



火山噴火で帰国延期も「もう一度」おかわり教室

選抜チーム遠征

東都大学準硬式野球連盟の選抜チームが11月22日から12月2日までインドネシアに遠征した。昨年に続く2度目の渡航で、現地のクラブチームとの対戦以外にも子供たちへの野球指導、野球用具寄贈など充実した内容となった。(写真提供・東都大学準硬式野球連盟)

選手が自主的に

アクシデントもプラスに変えた。選手団は当初、11月29日に帰国する予定だったが、バリ島アグン山の大規模噴火による空港封鎖

で足止めを余儀なくされた。選手40人を含めた一行50人の延泊代は...。代表チームの杉山智広監督(34)「日大コーチ」が頭を抱えた時だった。「野球指導をもう1度やりましょう」という声が選手から自然発生した。それまでの滞在中も連日、キャラバンと称する巡回野球教室を開いて現地の少年たちに野球の楽しさを伝えてきたが、3日間の日程延長を利用して再びキャラバンを実施。中村怜主

現地チーム対戦

昨年にも続く2度目の遠征は杉山監督が同国代表チームの野中寿人監督(55)と日大三高野球部の同窓である縁から実現。サイズが硬式球とほぼ同じで耐久性のあるゴム製の準硬式球の普及は、雨が多く水はけの悪い同国のグラウンドに合っているとの狙いもある。親善試合には現地のクラブチーム5チームが参加。東都代表は2チームで編成し、6チーム総当たり戦を実施。試合後は東都の代表選手が対戦相手に技術指導した。昨年も参加した中村は「レベルは上がっています。昨年は打たれなかった変化球を安打にされたり、投手もボールの回転がよくなりました。投打ともに教えたことが生かされていると思いました。選手の教わりやすさを感じました。選手が自主的に」と感激していた。

インドネシアは世界野球ソフトボール連盟の最新ランキングで47位の途上国だが、来年同国で開催されるアジア大会へ強化を図っている。遠征中には同国青年スポーツ省とインドネシア野球発展に向けた覚書を交わし、20年まで遠征を続けて指導、用具提供を続けることになった。「言葉が違っても野球があればつながることがわかり、魅力、やりがいを感じました」と中村。白球一つで世界がつながることを実感していた。



現地少年たちへ 野球用具を寄贈

○：今回の遠征では現地の少年たちに用具を寄贈した。少年少女を対象に国内各地で行われている野球教室「ファンケル キッズベースボール」(主催・報知新聞社)の会場などで集まった使わなくなった野球用具を贈呈した。写真。中村主将によると「チーム単位には用具はありませんが、小・中学校には一切ありませんでした」とのこと。社会貢献活動と野球普及に一役買っていた。